様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ７ 月 ３１ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０１７７

研究課題名（和文）第二次世界大戦をめぐる倫理的問題と理想主義の諸形態―アンドレ・ブルトンを中心に

研究課題名（英文）Ethical problems and various forms of idealism during the Second World War : André Breton and his contemporaries

研究代表者
有馬　麻理亜（ARIMA, Maria）

近畿大学・経済学部・講師

研究者番号：９０５９４３５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,100,000円、（間接経費）　630,000円

研究成果の概要（和文）：第二次大戦期におけるブルトン固有の理想主義を分析したうえで、ファシズムの台頭期にツァラ、バタイユとブルトンの再接近を可能としたのは異なる形態の理想主義であること、また、バタイユとブルトンに共通する理想主義的傾向が、大戦後の両者における神秘主義への関心や聖なるものへの追求に関係していることを明らかにした。さらに30年代に断絶したアラゴンとの思想上の相違が文体やジャンルの選択に表れていることを示した。

研究成果の概要（英文）：Firstly, we analyzed Breton's original form of idealism. After that we showed as follows:what reunited Breton, Tzara and Bataille, especially as the fascism raised his head, was their different types of idealism; Breton and Bataille's idealism is one of the important factors that would show their interests in common after the Second World War (pursuit of the sacred, interests in spiritualism, etc.). We also examined the relation between ideology and literary aspects (style, choice of genre), in the case of Aragon and Breton in the nineteen-forties.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：アンドレ・ブルトン　理想主義　第二次世界大戦

１．研究開始当初の背景

本研究の背景は、博士論文とその後に発表した論文等である。博士論文においては、『狂気の愛』（1937）に初めて登場した「崇高点」を中心として、ブルトンの思想を体系化した。この「崇高点」に着目した理由は、先行研究はこの概念に多様な源泉を見出し、この点がシュルレアリスムの目指したあらゆるものの象徴のようにとらえていたものの、この概念とブルトン思想との、具体的かつ体系的に論じることはなかったからである。そこで先行研究で扱われたさまざまな分野（精神分析や秘教、哲学、美学、修辞学）と関わりがあった、伝統的崇高の概念に着目した。そして、いかなる影響のもと両者に共通点があるのか（思想的・美学的背景）、いかなる状況において「崇高点」が構想されたのかを論じた。これらの研究によって得られた成果が、30年代のブルトン思想における傾向、《idéalisation sans idéalisme》「理想（観念論）なき理想化（観念化）」である。ブルトン自身がのべているように、20年代はシュルレアリスムの「直観的」時代であり、形而上的・理想主義的傾向が強かった。30年代、ブルトンはシュルレアリスムの「理論化」を目指す。そして彼は観念論と唯物論、既存の主観と客観といった概念を乗りこえるような新たな知を構築することが必要だという。その試みを象徴したのが、30年代のオブジェ論である。ブルトンは、バシュラールが用いた知の分野へおける弁証法の緩やかな適応を参考にして、独自のオブジェ論を展開する。そして、物質に観念（理想）を流入する、あるいは物質そのものを極度に観念化する方法を発見する。これが、既存の観念論に依拠することなく物質を観念化させる《idéalisation sans idéalisme》の誕生であり、山頂という物質が観念化された「崇高点」誕生を促した思想形態なのである。この新たな思想形態は、ブルトンが20年代示していた、理想や絶対的なものへの熱望に裏打ちされており、観念論哲学、特にヘーゲルの影響が大きい。しかしながら、30年代になると共産主義への接近と挫折、さらにマルクス主義への愛着によって、ブルトンはこの理想主義と唯物論的思考との間で折り合いをつけねばならなくなった。この思想的・歴史的背景が、新たな思想形態を生みだす原動力に変わっていく。

そこで、このブルトン独自の思想形式が、第二次世界大戦期から戦後にかけてどのように変容するのか、ブルトン以外の作家における理想主義的形態がどのようなものであるのかを分析し、最終的にこれらの理想主義の形態を生みだす、思想的・倫理的問題を明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

本研究は、大戦間から第二次大戦後の文学における理想主義の受容とその多様な形態を分析した上で、これらの背後にある作家の倫理的問題を明らかにすることを目的とする。主要な研究対象をブルトンとするとともに、彼と関わりのあった同時代作家（バタイユ、ツァラ）やその他、理想主義的・神秘主義的色彩の強い作家も考慮に入れたいと考えた。当時の知識人の動向を考慮しつつ、20-30年代のブルトンにみられた理想主義がどのように変化するのか、40年代登場する「悪」の主題や秘教主義への回帰とどのように関わるのかを探る。具体的には、本課題は次の三つの主題に取り組むことを目的とした。

（１）主題１：ブルトン思想と政治的背景
–《 idéalisation politique 》?：大戦中から戦後にかけて、ブルトンの関心領域は拡大する。その例が黒いユーモア、神秘主義、フーリエ思想である。第二次大戦をめぐって構築されていくそれらの関心は、戦争やファイズムの台頭といった政治的背景とどのような関係があるのか。

（２）主題２：倫理的主題と戦争
40年代には悪や愛、人間性といった倫理的主題が次々と登場する。『上昇記号』(1947)で、ブルトンはアナロジーが善や健康といった倫理的要請によって上昇するという詩的理論を展開する。上昇や高みへの熱望はすでに論じた「崇高の詩学」の基盤となるが、『秘教17』（1944-1947）では、戦争という「悪」の問題が新たに登場する。ブルトンの倫理観が大戦を通じてどのように変化するのか。

（３）主題３：同時代の作家との関係
ツァラやバタイユといった、ブルトンと関係があった作家との対立を超えた共謀関係を明らかにする一方で、30-40年代ブルトンと思想的・政治的立場とは対立していたが、ブルトンと共通して独自の神秘主義を打ちだしている作家を取りあげたい。彼らの思想的相違を考慮しつつも、その背後にある理想主義的形態がいかに多様な形態を持ちうるのか明らかにしたい。

３．研究の方法

（１）３０年代のブルトン思想における影響の解明
先に述べた本課題の目的（１）【３０年代から４０年代のブルトンの関心を明らかにする】と（３）【同時代との作家の関係を明らかにする】双方に関連する問題に取り組む。30年代のブルトン思想において、ヘーゲル哲学の影響は絶大であり、先に挙げた博士論文の主題である「崇高点」についても、ブルト

ン自身がヘーゲル哲学の影響を挙げている。この影響がいかなるものなのかを明らかにするにあたって、興味深い事象がある。それは一般的に３０年代初頭に論争を交わした同時代作家ジョルジュ・バタイユにおけるヘーゲル受容との相違点である。一般的にバタイユにおけるコジェーヴの影響はよく知られており、一方、ブルトンは１９世紀のヴェラ（A.Vera）のヘーゲル訳に親しんだとされる。その両者が、30 年代初頭まさにヘーゲル哲学を中心に論争を行った。そこで、二人のヘーゲル受容を分析し、両者の思想関係を明らかにすることが重要であると思われた。この研究を進めるうえで、新たな研究方法に取り組むことにした。それがジャン＝フランソワ・ルエット（Jean-François Louette）が提唱する、作家を対立的関係に縛らず、「両者の対峙を可能にする場」を探ることを目指すことである（ジャン＝フランソワ・ルエット、「プレイヤッド版『小説と物語』編集余話」、『水声通信』、30 号、水声社、2009 年）。この提言は、両者の対立関係という旧い枠組みを取り去り、両者の共同作業、共犯関係の場としてのヘーゲル哲学という新たな視点を提供してくれた。この方法は、本研究の主題３における、ブルトンと対立的とみられた作家を分析する上で重要な方法だと考えた。

（２）ファシズムの台頭による影響

ファシズム台頭期におけるブルトン思想の変化を明らかにするために用いる研究方法として、ただ単にブルトンの著作を分析するのではなく、彼が以前論争を交わしたバタイユと共闘したことを取りあげた。というのも彼らを結びつける共通の関心である、フロイトとマルクス思想の受容を明らかにすることで、大戦間から大戦期における、両者の倫理的問題と思想的問題を探ることが可能であると思われたからだ。そこで二人が共同で行った、反ファシズムの『コントル・アタック』やバタイユの『ファシズムの心理構造』と、ブルトンのテキストを分析するとともに、当時の他の知識人の動向も考慮した。

（３）30 年代における他の同時代作家、および知識人との関係

30 年代は、それまでのシュルレアリスム運動に直接かかわった作家との断絶や再会の時代でもある。これらの断絶・再会を導いた思想的・歴史的背景はいかなるものだったのか。そしてこの時代を通じて変化していくブルトンの思想にどのような影響があったのかを明らかにした。この問題に関して念頭に置いたのは、特にトリスタン・ツァラとルイ・アラゴンであった。前者は 30 年代に短い期間であったが共に活動した事実があり、後者は 30 年代前半に政治的方向性の違いによって関係が悪化している。さらに両者とも、ブルトンと共通する、革命を求める理想主義的情熱を抱いていた。この点を鍵として、三者の理想主義的形態の相違点を調べた。

（４）1940 年代におけるブルトン思想の変容と同時代作家との関連

秘教、フーリエ思想の受容やユーモアといった、40 年代に顕著なブルトン思想の特徴に関する研究準備を最終年度に開始した。その際、一貫性を保つため、既成の観念論や唯物論に立脚することなく、理想主義をいかに温存するのか、という 30 年代におけるブルトンの問題意識とあわせて考察するよう努めた。

研究方法としては、先にも述べたように、今まで一般的に対立的と考えられてきた作家を扱う際、そのような固定的な視点にこだわらず、むしろ両者の対立を可能にする場について考えることを目指した。分析方法に関しては、コンパニョンの *Les antimodernes*（P.U.F., 2005）、ジェニーの *Je suis la révolution*（Belin, 2008）、といった一つの主題を通じて複数の作家を扱っている研究を参考にしたうえで、対象となる作家を制限し、パノラマ的研究にならないように努めた。

４．研究成果

論文の詳細に関しては、次項の「主な論文発表等」の番号を記入する。

（１）平成 23 年度

当該年度の成果は、バタイユとブルトンにおけるヘーゲル哲学の受容について分析することで、両者におけることなる理想主義的傾向を明らかにしたことである（「それはかれであったから　それはわたしであったから-ブルトンとバタイユの対峙を可能にした場としてのヘーゲル」論文⑤）。本論では、一般的に知られているコジェーヴに影響を受ける以前のバタイユとブルトンのヘーゲル受容を対比させることで、先行研究が指摘してきた両者の対立関係とは異なる、互いを必要としながら対立を乗りこえ、独自の思想を形成していくというある種の共犯関係を示すだけでなく、二人を繋ぐものこそが独自の理想主義的傾向であることを明らかにした。また、雑誌『社会批評』に掲載された論文の一部を翻訳したうえで分析を行なうことで、ブルトンとバタイユのヘーゲル解釈にジャン・ヴァール（J. Wahl）というヘーゲル研究者がいたということを明らかにすることができた（「『哲学雑誌』のヘーゲル三篇を評す」論文④）。一方、本研究課題の土台となる、30 年代以前のブルトンにおけるヘーゲル受容と彼の思想の核となる理想主義の芽生えを論文「直観的理想主義の誕生-若き日の

ブルトンにおけるヘーゲル読解とし『シュルレアリスム宣言』」（論文③）で示した。

（２）平成 24 年度
当該年度では、まず 1930 年代におけるツァラとブルトンについて論じた口頭発表「1930 年代におけるトリスタン・ツァラとアンドレ・ブルトン」（発表②）を行なった。この発表の目的は、先行研究が対立・ライバル関係としてとらえてきた二人の詩人を、1930 年代に両者が共に活動した事実から、彼らを結びつけた思想的・政治的関係を明らかにすることであった。そして、革命を求める理想主義が二人の最接近を可能にし、両者の思想の発展に大きな影響を与えたことを論じた。一方、「アンドレ・ブルトンにおけるイデオロギーとしての文体―「デュシェーヌ親父の帰還」をめぐって―」という題のもと行なった（発表①）。この発表では、第二次世界大戦をめぐって、ブルトンの思想の変化を大衆言語の使用法を例に文体の面から分析した。発表内容は同じ題のもと掲載された（論文②）

（３）平成 25 年度
当該年度では、先に述べたツァラとブルトンについて論じた口頭発表「1930 年代におけるトリスタン・ツァラとアンドレ・ブルトン」に基づき、《 Les retrouvailles nécessaires d’André Breton et de Tristan Tzara : Reflet et Interprétation des idées autour des années 30 》という題の論文を公刊した（論文①）。先に述べた発表内容を発展させ、両者の最接近を可能にした革命的理想主義と、再び断絶に導く政治的背景だけでなく、さらに言語や芸術に対する意見の相違や両者の作品に表れる二人の再会による影響を分析した。

なお、以前から準備していた、両大戦期間におけるブルトンとバタイユによるマルクス＝フロイト主義の受容に関する論文（「共鳴とすれ違い–「コントル＝アタック」前後のブルトン、バタイユそしてライヒ–」）も既に執筆を終えており、こちらは雑誌公刊を待っている状態である。また、現在ブルトンと秘教、フーリエ主義といった戦後のシュルレアリスムの問題を、本研究課題のテーマである「理想主義の形態」と関連させた論文を準備中である。

これらの成果は、いずれも交付申請書に記載した、30-40 年代におけるブルトン思想と、彼と関わった作家との関係についての分析という当該研究の目的と計画に沿ったものである。

（４）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト
ブルトンにおける理想主義の形態、および彼と直接的に影響のあった作家や思想家における異なる理想主義の形態に関しては、ある一定の成果を発表できたと思われる。今後はまず、最終年度で分析した、ブルトンと直接関わりはない思想家や作家で、理想主義や神秘主義への傾倒といった傾向を見せているものとの関連についての結果を継続して発表していきたい。そして、このようなブルトンにおける理想主義の傾向が、戦後の秘教やフーリエ主義と密接に関係していることをより説得力をもって示したうえで、新たな問いへと繋げたい。それは本研究課題で扱ったブルトンの倫理的問題と神秘主義、フーリエ思想への関心が、第二次世界大戦を通じてシュルレアリスムが一つの社会思想を形成していく過程に必要な要素だったのではないか。そしてその社会思想とは具体的にどのようなものであるのか。また、この社会思想は既存の文明というものに対して提示された、戦後シュルレアリスムの反抗のモデルであったのではないかという問いである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 有馬麻理亜、《 Les retrouvailles nécessaires d’André Breton et de Tristan Tzara ：Reflet et Interprétation des idées autour des années 30 》, 『フランス語フランス文学研究』、査読有、103 号、日本フランス語フランス文学会、2013 年、pp97-114.

② 有馬麻理亜、「アンドレ・ブルトンにおけるイデオロギーとしての文体―「デュシェーヌ親父の帰還」をめぐって―」、『関西フランス語フランス文学』、査読有、19 号、日本フランス語フランス文学会関西支部、2013 年、pp.3-14.

③ 有馬麻理亜、「直観的理想主義の誕生―若き日のブルトンにおけるヘーゲル読解と『シュルレアリスム宣言』」、『EBOK』、査読有、24 号、神戸大学仏語仏文研究会、2012 年、pp.23-40.

④ 有馬麻理亜、「『哲学雑誌』のヘーゲル三篇を評す」（翻訳・解題）、『水声通信』、査読無、34 号、水声社、2011 年、pp.188-191.

⑤ 有馬麻理亜、「それはかれであったからそれはわたしであったから―ブルトンとバタイユの対峙を可能にしたヘーゲル」、『水声

通信』、査読無、34 号、水声社、2011 年、pp.221-232.

〔学会発表〕（計２件）

① 有馬麻理亜、「アンドレ・ブルトンにおけるイデオロギーとしての文体―「デュシェーヌ親父の帰還」をめぐって―」、日本フランス語フランス文学会関西支部大会、2012 年 11 月 17 日、於芦屋大学

② 有馬麻理亜、「1930 年代におけるトリスタン・ツァラとアンドレ・ブルトン」、日フランス語フランス文学会秋季大会、2012 年 10 月 20-21 日、於神戸大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等：なし

６．研究組織
(1)研究代表者
有馬　麻理亜（ARIMA, Maria）
近畿大学・経済学部・講師
研究者番号：*90594359*
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし